

## 収入保険加入者の声を ご紹介します！

「安心して農業を経営するために収入保険制度は必要だ」と話すのは、相模原市緑区の内藤光夫さん（68）。大豆や果樹の複合的農業を行っている。1979年に経営を法人化し、有限会社内藤農産として青色申告をしている。

内藤さんは大豆やブルーベリー、コンニャク芋などの栽培を行っている。栽培割合が大きい大豆はブランド「津久井在来大豆」として神奈川県平均価格より高値で販売、キロ約600円で取引されている。内藤さんは「ブランド展開で独自の価格設定をしている農産物があるので、販売

収入全体が対象になる収入保険は魅力がある」と話す。内藤さんは近年増加しているシカやイノシシによる獣害や暴風雨の被害を懸念しているため、農業共済の対象でない果樹の品目や露地野菜が補償の対象になることにも魅力を感じている。

「昨年は妻が体調を崩して入院してしまった。家族経営の場合人員不足は経営にも影響が出る」と話す内藤さんも避けられない、けがなどの様々なリスクがあるため、収入保険制度を安心して農業経営できる「備え」として考えた。



## 【安心経営には “備え”が必要】

有限会社内藤農産

内藤 光夫さん(相模原市緑区)

経営内容：大豆 27<sup>畝</sup> ブルーベリー 10<sup>畝</sup>  
カキ 10<sup>畝</sup> 露地野菜 30<sup>畝</sup>

## 【幅広い補償が魅力】

片野 泉さん(伊勢原市笠窪)

経営内容：水稲 1.7<sup>畝</sup> トマト 15<sup>畝</sup>  
露地野菜 30<sup>畝</sup>

「自然災害だけでなく、けがや病気などで収入減少した場合でも補償対象になるので加入を決めた」と話すのは、伊勢原市笠窪の片野泉さん（59）。水稲やハウスでのトマト、露地野菜の栽培を行っている。

トマトは同市の「うまいものセレクト」に認定されており、JA農産物直売所やマルシェ、ふるさと納税の返礼品でも人気だ。

片野さんは数年前に田植機を整備していたときに右腕を負傷し、夏野菜の栽培ができず大幅な収入減少を経験した。そのため、収入保険制度の説明を聞いてすぐに加

入しようと思ったそう。「今は自分のことは自分で守らなければいけない時代。農家のために作られた制度を上手に活用していきたい」と片野さん。

昨年からは息子さんも農業を手伝うようになり、今後の経営がどのように変化していくか楽しみだという。

「収入保険は新たな品目に挑戦する場合や、規模拡大をする場合など農業においてチャレンジしたい人には特に魅力的だと思う。何かあったときのためにも、興味がある人は早めの検討をおすすめしたい」と語る。

